

## 人物像の検討を通して琉球王国の一端に触れる(Ⅱ) —那覇市のフィールドワークから—

増田 康弘

### 1. はじめに

筆者は以前、琉球王国が時代の流れに翻弄されながらも、たくましく生き残ろうとした姿を知ることが、さまざまな課題を抱える現代の沖縄に、また日本に何らかの示唆を与えるのではないかと考え、まずはフィールドワークを通して悠久の歴史に触れ、琉球王国の姿を人物像の検討からとらえようと、「人物像の検討を通して琉球王国の一端に触れる(Ⅰ)—南城市と那覇市のフィールドワークから—」と題した資料・調査報告をまとめた<sup>1)</sup>。そこでは、①百十踏揚の墓、②尚布里の墓、③尚泰久の墓、④佐敷上グスク、⑤佐敷ようどれ、⑥尚徳王陵墓跡、⑦羽地朝秀の墓、⑧宜湾朝保の墓、⑨蔡温の墓、⑩西の玉陵を巡った報告と、その史跡にまつわる人物の拙い解説を記したのであるが、本稿はそれに続くものとなる。本稿では単に琉球王国の一端に触れるだけでなく、当時活躍した人物の功績と現代社会とのつながりについても言及したい。今回、筆者が訪れた史跡は、①崎山御嶽<sup>2)</sup>、②崎山樋川<sup>3)</sup>、③末衛増御嶽<sup>4)</sup>、④御茶屋御殿跡<sup>5)</sup>、⑤国吉比屋の墓<sup>6)</sup>、⑥儀間真常の墓、⑦ヒジ川橋(および取付道路)<sup>7)</sup>、⑧程順則の墓、⑨羽地朝秀生家跡<sup>8)</sup>、⑩程順則生家跡<sup>9)</sup>など多岐にわたるが、ここでは「儀間真常の墓」と「程順則の墓」を取り上げ報告する。

### 2. 那覇市のフィールドワークから—2016年10月29, 30日実施

#### (1) 儀間真常の墓(ぎましんじょう1557~1644)

儀間真常の墓は、那覇市首里崎山町にある首里カトリック教会<sup>10)</sup>の南側に存する。もとの墓は住吉町にあったが、戦後アメリカ軍の港湾施設として接収され、跡形もなく敷きならされたため、1959年に現在の場所に移設建立された。現在の墓は1993年に建て替えられたものである<sup>11)</sup>。墓の左右に石碑があり、墓に向かって左側は「儀間真常之墓

表<sup>12)</sup>」であり、右側は「糖業顕彰碑<sup>13)</sup>」となっている。この地域は「ヒジガービラまーい<sup>14)</sup>」の一部になっており、儀間真常の墓のほかにも、さまざまな史跡が存在し、歴史や文化の跡を感じることができる。

さて、儀間真常は1557年、垣花の儀間村で首里王府の役人をしていた父である儀間真命の三男として生まれた。唐名<sup>15)</sup>は麻平衡。成人した彼は首里王府で役人として働き、36歳のときに父の跡を継ぎ、儀間村の地頭となり村のために尽力したとされる。1596年、39歳のときには琉球王国の使者として明（中国）に渡り、現地の農作物の豊かさに衝撃を受けたという。当時の琉球の土地は固く痩せていたうえに、頻繁にやってくる台風の影響で農作物が育たず、また技術も未発達であったため生産量は限られたものであった。加えて、1609年以降の琉球は、その立て直しがなされるまでの間、薩摩の侵攻によって疲弊していたことも貧しさに拍車をかけたとされている。そのような状況の中、儀間真常は農業のほか、繊維業や製糖業などに積極的に取り組み、「沖縄産業界の父」と呼ばれるに相応しい、さまざまな功績を残したのである。彼は88歳でこの世を去ったのであるが、沖縄産業の礎を築いた人物として、その名を歴史に残している。以下、彼の功績について触れる。

#### ①甘藷（サツマイモ）の普及

まず、甘藷の普及についてであるが、これは1605年に野国総管<sup>16)</sup>が明（中国）から甘藷を持ち帰り、その栽培を成功させたことが契機となっている。儀間真常は、野国総管の元を訪れ甘藷の苗を譲り受け、栽培方法を聞き、自分の手で甘藷の繁殖を成功させ、農民を指導しながら普及させていった。その後、甘藷は15年ほどで琉球の人々の主食となり、琉球の食料事情は飛躍的に改善された。やがて、甘藷は薩摩藩に伝わり、江戸幕府の奨励<sup>17)</sup>のもと日本全土に広がりを見せ、琉球の人々だけではなく日本人をも飢えから救ったのであった。なお、琉球王国の正史ともいべき『球陽』には、「(尚寧王)十七年、総官野国、中華ヨリ蕃薯ヲ带来シ以テ国ニ播ク」と記されている<sup>18)</sup>。

#### ②木綿織の普及

次に、木綿織の普及である。1609年、琉球は島津氏の侵攻を防ぐことができず、尚寧王ほか100人もの高官が薩摩に連行された。その際、儀間真常も勢頭役（警護役）として随行していた。彼はこの屈辱的な状況下にあっても、薩摩滞在中に綿産業の調査を行い、およそ2年半後の帰国時に綿の種子を持ち帰り、故郷で栽培を始めたのであった。栽培に成功した彼は、泉崎<sup>19)</sup>に住む日本人姉妹である梅千代と実千代から木綿織の技法を学んだという。その後、琉球の木綿産業は急速に発展し、のちの「琉球緋<sup>20)</sup>」となるのであった。なお、この木綿織普及の過程については、那覇市企画部市史編集室編纂の『那覇市史 資料篇 第1巻5』に記載されている（一一五、麻姓六世 眞常)<sup>21)</sup>。

### ③黒糖生産の普及

さらに、黒糖生産の普及である。島津氏の侵攻以降、琉球は薩摩藩から農作物を年貢として納めることが命じられ、人々の暮らしは苦しくなっていった。そのような状況下、儀間真常はサトウキビを使った黒糖の製造を考えたのであった。当時の琉球においてもサトウキビは栽培されていたが、黒糖をつくる技術はなかった。そこで、彼は黒糖の製造方法を学ばせるべく、儀間村の住民二人を明(中国)の福州に派遣した。明(中国)から導入した技法は、牛を動力とする「二転子三鍋法」と呼ばれ、2本の木の車を回転させサトウキビの汁を圧搾し、石灰を加え3つの鍋で順に煮詰め、桶に入れて冷やし、黒糖のかたまりをつくるといったものであった。彼はこの技法を用いて自宅での黒糖の製造に成功し、これを世に伝えることで、黒糖産業は琉球全土に広がったとされる。なお、前述の『球陽』には、「(尚豊王)三年、麻平衡、始メテ黒糖ヲ製ス」とある<sup>22)</sup>。

### ④浄土宗の普及

最後に、浄土宗の普及についてであるが、琉球に浄土宗を伝えた人物は、袋中上人<sup>23)</sup>である。上人は江戸時代の名僧であり、1603年に教えを求めて明(中国)に渡ろうとするも、豊臣秀吉の朝鮮出兵の影響で入国がかなわず、アジアを転々とし、最後にたどり着いたのが琉球であった。このとき上人を取り調べた役人の中に儀間真常があり、これが二人の出会いとなったようである。上人の知見と人柄に魅せられた儀間真常は、当時の国王であった尚寧<sup>24)</sup>に引き合わせたという。その後、上人は尚寧王の深い帰依を受け、琉球において浄土宗の布教を始めたのであった。儀間真常もまた上人に帰依し、師弟関係を結んだとされている。なお、上人が伝えた浄土宗は、踊り念仏を定着させ、やがてエイサー<sup>25)</sup>へと発展するきっかけをつくったとされる。



儀間真常の墓



儀間真常の墓

## (2) 程順則の墓（ていじゅんそく1663～1734）

程順則の墓は、那覇市識名の「識名霊園」に存する。彼の墓は県道222号線の「識名」バス停からほど近い場所にあり、墓の前に立つ石碑には「程順則名護寵文之墓」と刻まれている。

程順則は唐名であり、名護親方寵文とも呼ばれる。彼は学問に秀でた程泰祚を父にもつ名家の出身である。彼は1663年に那覇の久米村で生まれ、父の跡を継ぎ真和志間切古波蔵の地頭を勤めながら、鄭弘良<sup>26)</sup>から儒学を学んだ。程順則は詩人としても名高く、日本本土に渡った際は、摂政や藩主が彼を招いて作詩を求めたとされている<sup>27)</sup>。また、江戸では新井白石<sup>28)</sup>と意見交換を行い、白石はそこで得た知識から『南島志<sup>29)</sup>』を著したという<sup>30)</sup>。

さて、程順則は生涯に五度ほど清（中国）に渡っている。一度目は1683年であり、福州での勉学を志し、著名な学者であった陳元輔<sup>31)</sup>、竺天植<sup>32)</sup>の門に入り、5年間学んだ。二度目は1689年であり、接貢存留通事<sup>33)</sup>に任ぜられ福州に渡り、2年間の任期を終え、帰国。その際、自費25金（20金ともいわれる）を投じて『十七史<sup>34)</sup>』を購入し持ち帰り、孔子廟<sup>35)</sup>に献本した。三度目は1696年であり、北京大通事<sup>36)</sup>として、鄭弘良大嶺親雲上に随い渡清。滞在中に訪ねた名所旧跡を題材に漢詩をつくり、『雪堂燕遊草<sup>37)</sup>』を刊行した。四度目は1706年であり、進貢正議大夫<sup>38)</sup>として、耳目官<sup>39)</sup>馬元勳宮平親雲上良康とともに福州に赴く。その後、濟寧州へ向かい、次いで北京に到る。1708年に福州に戻り、資金60金を投じて『六論衍義』一部、『指南広義』一部を版行した。そして、最後に渡ったのが1720年であり、冊封使の帰国の際に同行した。福州滞在中に『皇清詩選<sup>40)</sup>』数十部を自費で購入し、帰国後、每部三十巻を王府書院に、一部を聖廟に、一部を評定所に献上し、残りを師友に配ったとされる。このとき程順則59歳であった。

その後、1728年66歳のときに名護間切の総地頭に任命され、「名護親方」となった。有徳の人物であるという評判も高く、その清廉な人柄は人々から敬愛され、いつしか「名護聖人」と呼ばれるようになった。そして、1734年に72歳でこの世を去ったのである。

なお、彼の生家跡は那覇市久米に、頌徳碑は那覇市若狭の天尊廟地に存する。以下、彼の功績を確認する。



程順則生家跡（案内板）



程順則頌徳碑

### ①『六論衍義』の普及

1683年、21歳になった程順則は清（中国）の福州に留学し、儒学の大家である陳元輔の弟子となり、昼夜を問わず勉学に励んだ。また、彼は竺天植という儒学者のもとでも学びを深め、このときに范鋌<sup>41)</sup>が記したとされる『六論衍義』と出会ったという。「六論<sup>42)</sup>」とは中国皇帝が民衆を教化するために諭した6つの教えであり、「衍義」は解説書という意味である<sup>43)</sup>。この『六論衍義』に感動した程順則は、四度目の渡清の際に巨額の私費を投じて印刷し、琉球に持ち帰り国王に献上したとされる。『六論衍義』は道徳教本であるが、程順則はこれを道徳教化のためだけではなく、中国語官話の正音を習得するのに理想的なテキストとし、中国語の学習にも用いたのであった。また、常に庶民教育に心を配っていた程順則は、『六論衍義』の教えを広めるために多くの琉歌<sup>44)</sup>を詠み、それを庶民が日常的に愛誦することで、厚い人情と道徳をつくったとされる。

1714年、程順則は徳川家継の将軍就任を祝う慶賀使として江戸に向かう途中、『六論衍義』を薩摩藩主の島津吉貴に献上した。そして、その5年後の1719年には、吉貴から次代将軍の徳川吉宗に献上されたという。吉宗はこれを非常に高く評価し、荻生徂徠<sup>45)</sup>に訓点をほどこすことを命じ、また室鳩巢<sup>46)</sup>に和訳を命じた。その結果、『六論衍義大意』が完成し、寺子屋教育や明治以降の日本全国の初等教育において広く利用されたのであった。

ところで、前述のとおり程順則は『六論衍義』を広く普及させたわけであるが、彼が教育に果たした大きな功績の1つに、琉球初の公的教育機関である「明倫堂<sup>47)</sup>」の設立が挙げられる。ここでは、語学や航海技術のほか、儒教の教えに則った人のあり方が指導された。なお、明倫堂の初代校長は程順則が務めたという。

## ②『指南広義』の執筆

『指南広義』は、中国の福州と那覇とを航行するための手引書であり、「海島図」「針路条記」「伝授針法本末考」「周公指南地羅二十四位図」「定更数之法」「風信考」「逐月暴風日期」「四時占候風雲」「潮汐論」「観星図」などの論文から成る。「指南」は磁針を使つての航海術であり、「広義」は大方の人々にその航海術を広くわかつてもらうということである<sup>48)</sup>。

程順則は本書の執筆にあたって、2つの情報源を使用した<sup>49)</sup>。1つは、久米村で代々伝えられてきた水先案内人の心得である。もう1つは、中国船の水先案内人から学んだ航海術に研究改良を加えた自分自身の経験である。その内容は、①海図や天体を利用した航海、②天気予報の仕方、③天妃（媽祖）<sup>50)</sup>への願掛け、④吉日の決め方など多岐に及ぶ。たとえば、前述の「風信考」には次のようなくだりがある<sup>51)</sup>。

清明以後は大気が南から北に移動する。そして南風がたえず吹くようになる。霜降になると大気は北から南へ移り、北風が吹く。

もし、決まりきった風向きに異変が生ずると、これは暴風の前ぶれであつて、舟を出してはいけない。暴風はいちばん激しいのを颶風といい、そのつぎに強いのは台風である。颶風は瞬間的に強いもので、ただちに止む場合があるが、台風はそれよりやや烈しさが劣るが、持続的で一日中暴れまわるときもあれば、数日間も続いてようやく収まる場合もある。

颶風とは、現在でいう温帯低気圧のことである。つまり、ここでは温帯低気圧と台風とを区別した記述となっているのである。300年以上前の程順則の知識が、現代の気象学に通じるものであつたことを表す記述であるといえる。

なお、『六諭衍義』と『指南広義』の版行については、那覇市企画部市史編集室編纂の『那覇市史 資料篇 第1巻5』に記載されている（二六三、程姓七世 程順則）<sup>52)</sup>。



程順則の墓



程順則の墓

### 3. まとめ

儀間真常は沖縄産業の礎を築いた人物である。彼が取り組んだ甘藷の繁殖や木綿織の製作、黒糖の製造は、見事に沖縄の産業として成立している。彼は何を見、何を聴き、何を感じていたのであろうか。きっと冷静な態度、鋭い感受性、深い洞察力、豊富な知識と技術で今を捉え、未来を見据えていたのであろう。彼が現代に生きていたならば、その卓越した先見の明をもって何に取り組むのであろうか。

一方、程順則は琉球を代表する学者・詩人であり、道徳教育に大きな功績を残した人物である。彼は死後、人徳と知性の象徴となったわけであるが、1844年に編纂された『名護親方善行伝』には次のように記されている<sup>53)</sup>。程順則の少年時代は「天性は仁孝、気だては柔和で、表情には喜色をたたえ、良く父母の願いを汲んで仕え、子の職分を尽くし、はたまた学業を好んで、昼夜勉強を止める時がなかった……」。十代には「正しくない書物や非礼の様子を見ることを嫌い、専ら人倫を重んじ厚く孝行した」。そして、成人してからも高德の人とされ、「名護聖人」と呼ばれるまでになったのである。さまざまな問題を抱える現代の沖縄に、そして日本に、彼はどのような教えを説くのであろうか。

儀間真常と程順則。2人に共通して言えることは、彼らの功績が琉球のみならず、当時の日本にも影響を与えているという点である。儀間真常により広められた甘藷は飢饉から日本人を救い、また程順則がもたらした『六論衍義』は日本人の教育に多大な貢献を果たした。それらは時空を超え、現代を生きる我々にも、静かに、そして確実に響いている。

### 4. おわりに

今回は「琉球の五偉人<sup>54)</sup>」に数えられる儀間真常と程順則の墓を巡った報告であった。これで琉球の五偉人すべての墓を訪れたことになる。偉大な先達の墓前に立ち、手を合わせ、あらん限りの想像力を働かせ、歴史に思いをはせる。その行為にどのような意味があるのか、今の筆者に明らかにすることはできないが、筆者の中に「郷愁」「憧憬」「思慕」のような感覚があることは間違いない。さながら、「琉球サウダーチ<sup>55)</sup>」といったところだろうか。今後の課題として、フィールドワークを続ける傍ら、一人の人物についての生涯や功績、論理などを深く考察することを挙げたい。

最後に、筆者が沖縄を訪ねるたびにお世話になっているOCVB認定平和ガイドの上原幸典氏に心から感謝申し上げるとともに、再会を願いつつ本稿を終える。

## 注

- 1) 流通経済大学社会学部論叢第27巻第2号所収。なお、「人物像の検討を通して琉球王国の一端に触れる（Ⅰ）—南城市と那覇市のフィールドワークから—」における「2-(4) 佐敷上グスク」の中で筆者は、「もともと思紹が佐敷の按司であり、尚巴志は小按司であった」と記述しているが、「小按司であった」という表現は不適切であり、正しくは「尚巴志の身長が5尺に満たなかったため、そのように周囲から呼ばれていた」という意味である。また、「注38」において「閩」と記しているが、正しくは「閩」である。よって、次のとおり訂正する。122ページ5行目：誤）小按司であった。⇒正）小按司と呼ばれていた。／132ページ14・15・16行目：誤）閩⇒正）閩
- 2) 那覇市首里崎山町に存する。察度王の子である崎山里主の屋敷跡とされる。
- 3) 崎山御嶽の境内にあり、察度王時代は首里城の御用水であったとされる。
- 4) 那覇市首里崎山町に存する。俗に「ウガングー」と呼ばれる。以前は脇に井戸があり、馬追いの後に馬に水を浴びせたとされる。
- 5) 那覇市首里崎山町に存する。1677年に建てられた王府の別邸。首里城の東にあることから、冊封使の汪渾によって「東苑」と名づけられた。これに対し、識名園は「南苑」とされる。
- 6) 那覇市首里崎山町に存する。15世紀頃の人物で、査姓国吉家の始祖。護佐丸・阿麻和利の乱の後、護佐丸の三男であった盛親を養育したとされる。もとの墓は、儀間真常の墓とともに住吉町にあったが、戦後アメリカ軍によって接収されたため、現在地に墓を建立した。
- 7) ヒジガービラ（ヒジ川坂）を下り識名園に至る途中の金城川にかけられている橋のこと。
- 8) 那覇市首里大中町に存する。現在は駐車場になっている。
- 9) 那覇市久米に存する。県道47号線久米大通りの「西武門」バス停前。
- 10) 現在の教会が建てられている場所に「御茶屋御殿」が存在した。御茶屋御殿とは、1677年につくられた王家の別邸であり、国王の遊覧や中国からの冊封使に対する歓待などが行われた。
- 11) 那覇市教育委員会設置の歴史散歩の道「儀間真常の墓」ヒジガービラまーい案内板による。
- 12) 碑文「麻氏六世儀間眞常童稱眞市唐名平衡弘化三年生于父祖采邑垣花三十七歳繼家系爲眞和地間切儀間地頭職列親方部歴官勢頭役依功六十七歳叙紫冠正保元年十月十四日卒天壽八十八 眞常自少壯經世利民之志高傾心於殖産興業当之琉球雖以五穀常食糲土狹隘而地味亦不必肥沃加之爲颱風潮雨所襲住民屢瀕饑餓眞常痛戚之偶有総管野國氏齋蕃薯于福州力之栽培傳播爾來住民得免乎輟鮒之急咸其績也 眞常重碎肝胆数年始普及黑糖製造與棉布耕織後生仰其庇者今如斯 嗚呼偉培 瑩域素存住吉森蒙今次戰禍無跡裔孫門中嘆之更卜風水之宜於此報恩之万一」（田名真之（1994）『時代を拓く・儀間真常一人と功績』那覇出版社、279ページ）
- 13) 碑文「麻平衡儀間親方眞常は我が琉球の殖産に深く心を盡し尚豊王四年西暦千六百二十三年中国福州に領民を派して製糖の法を学ばしめ那覇港頭儀間村現在垣花に始めて黒糖の製造を試む これ糖業の濫觴なり 爾來斯業は逐年瞠目すべき發展を遂げ夙に輸出の大宗となり 爲めに住民の經濟を潤はし厚生を高む 先人の偉績洵に仰ぐに堪えたり 生誕四百年祭を迎ふるに際しこゝに風水の宜しきを相し碑を築きその恩恵を忘れざらんとし顕彰の微忱を效す」（田名真之（1994）『時代を拓く・儀間真常一人と功績』那覇出版社、280ページ）
- 14) 守礼門から金城ダム敷地内までの間に設定された約1.8kmの散策路。琉球王朝時代の古い道筋をたどりながら、地域の歴史や文化遺産に触れることができる。

- 15) 中国風の姓名のこと。当時の士族は、日本の名乗り（姓名）以外に、中国風の姓名をもっており、廃藩置県で琉球王国がなくなるまで続いた。
- 16) 中国から初めて甘藷を琉球にもたらした人物。「野国」は治めた村の名称、「総管」は進貢船乗組員の役職名（事務長）。本名については諸説あり。
- 17) 1732年、享保の大飢饉が起り多くの餓死者が出た。ときの將軍徳川吉宗は、凶作に強いサツマイモに着目し、儒教者・蘭学者であった青木昆陽に研究を命じ、生産性の改良を図った。
- 18) 桑江克英訳注（1971）『球陽』三一書房、70ページから71ページには、次のように記されている。「総官野国ハ野国邑ノ人、中華ヨリ蕃薯、盆上ニ植ヘテ帶來ス。麻平衡之レヲ聞キ往イテ其苗ヲ乞ヒ、且ツ栽培ノ法ヲ問フ。野国之レニ告ケテ曰ク、蕃薯ノ条ハ圈ヲ為ス、之レヲ地ニ埋ム、已ニ実熟スノ時ニ当リ、掘ツテ以テ之レヲ食スト。平衡其言ノ如ク以テ栽植ヲナス。数年ヲ歴テ蕃薯繁多ナリ。一年凶荒ニシテ五穀登ラズ。民人飢饉ナレバ、平衡掘ツテ蕃薯ヲ用イ、人民ヲ賑済ス。時ニ蕃薯以テ五穀ヲ補フ。本国ノ珍宝、此レヨリ大ナル莫キヲ念フ。即チ蕃薯ノ条ヲ切ツテ、之レヲ野ニ播ク。十五年間ニ歴リ至ルヤ、人ミナ蕃薯以テ飯食ニ充ツコトヲ知り、広ク国中ニ敷ク。……」
- 19) 現在の那覇市泉崎。那覇市の中心部に位置する。沖縄県および那覇市の行政や沖縄本島の主要交通機関である路線バスの中心地でもある。
- 20) その最大の特徴として、およそ600種という多彩な図柄を挙げることができる。幾何学模様の図柄は、琉球王朝時代から伝わる「御絵図帳」をもとに、職人たちが現代の感覚を取り入れてつくっている。
- 21) 那覇市企画部市史編集室（1976）『那覇市史 資料篇 第1巻5』那覇市役所、125ページには、次のように記されている。「同 三十七年己酉、薩州の幕下となり尚寧王上國の時勢頭役として随従し、同三十九年辛亥歸國す。この時眞常木綿種子を持渡る。幸にして日本女人梅千代、實千代二人泉崎に居住す。眞常二人の女を呼び始めて木綿を織造せしむ。これ當國木綿布の始めなり。」なお、文中の「同 三十七年」および「同三十九年」は、それぞれ「萬歴三十七年」「萬歴三十九年」を指す。
- 22) 桑江克英訳注（1971）『球陽』三一書房、76ページには、次のように記されている。「麻平衡深ク本国甘蔗アツテ製糖ヲ知ラサルヲ念フ。是ニ於テ儀間村ノ人ニ令シ、福建ニ到リ已ニ製糖ノ法ヲ学ハシム。纔ニ平衡ノ家ニ於テ、已ニ甘蔗ノ汁ヲ取り以テ黒糖ヲ熬ル。終ニ国中ニ及フ。」
- 23) 1552年、磐城国（現在の福島県いわき市）に生まれる。諸国を巡り念仏の教えを極める。明（中国）に渡ろうとするも上陸を許されず、琉球に漂着。琉球において、尚寧王のもと、民衆の教化、児童の教育、産業の振興、浄土念仏の普及に尽力し、『琉球神道記』を著した。琉球に3年間滞在した後、帰国。全国に20数ヶ寺を再興・建立したとされる。
- 24) 第二尚氏王統七代目王。第二尚氏王統で唯一の浦添尚家出身の王であり、没後は第二尚氏の歴代王が眠る「玉陵」ではなく「浦添ようどれ」に葬られた。1609年3月4日に島津軍が出帆を開始し、8日に奄美大島、22日に徳之島、24日に沖永良部島を制圧。27日には今帰仁城を占拠。4月1日、首里にて島津軍の鉄砲隊に敗れ、尚寧王が和睦を申し入れ下城。5日、首里城が占拠された。その後、尚寧王ら一行は捕虜となり薩摩へ出航。薩摩では島津家久、島津義久と対面し、1610年4月に江戸に向けて薩摩を発った。8月、駿府城で徳川家康と対

- 面。9月には江戸にて、ときの将軍徳川秀忠に謁見。その年の暮れに薩摩に戻り、1611年8月に琉球への帰国が許された。島津氏は「掟十五か条」を發布し、琉球王国における政治的権限を掌握しようと考え、島津家への忠誠を誓わせる起請文を出すよう要求したが、当時の三司官であった謝名親方利山だけが最後まで抵抗し、処刑された。尚寧王はやむなく署名し、同年の10月に一行は琉球に戻った。およそ2年半におよぶ長く苦しい旅であったという。
- 25) 沖縄の伝統的な盆踊り。旧盆の夜、各地域の青年男女が集落内を踊り巡り、無病息災、家内安全、商売繁盛などを祈り祖先の霊を供養する行事。
- 26) 訓詁師、講解師。久米村の鄭氏12世で大嶺親方と呼ばれた。なお、9世には鄭廻（謝名親方利山）がいる。
- 27) 井上秀雄監修、JCC出版部著（2011）『絵で解る琉球王国 歴史と人物』JCC出版、115ページ。
- 28) 江戸時代中期の政治家。修めた学問は、朱子学、歴史学、地理学、言語学、文学など多岐にわたる。
- 29) 琉球の世系、官職、風俗、物産などの情報を含む地理書。体系的で近世最高の沖縄研究書とされる。1719年に脱稿。
- 30) 井上秀雄監修、JCC出版部著（2011）『絵で解る琉球王国 歴史と人物』JCC出版、115ページ。
- 31) 中国清代の学者。程順則の父である程泰祚も彼に学んだとされる。
- 32) 中国福州の儒者。程順則は彼の机上に『六論衍義』を発見したとされる。
- 33) 「通事」は久米村の官位称号の1つで、通訳官を指す。20歳代になると、譜代の里之子家が若里之子（従八品）、通事家は筑登之座敷（従九品）に昇位して通事の位を得る。その後は官位相応の旅役を経て、それぞれ里之子親雲上（正七品）、通事家の出身は通事親雲上（従七品）となり、黄冠を戴く。その後も旅役を務めるか、または旅役の功に相当する功績を積むことによって当座敷（従五品）、勢頭座敷（従六品）へと進む。さらに功を積んで累進して、双方とも座敷（従四品）の位を得て都通事になる。唐榮の旅役は、進貢・接貢・謝恩使・慶賀使などの通事となって渡唐するが、その役目によって名称も異なる。20歳代で総官、王舅通事、通事を務め、その後は旅役を重ねるごとに順次、副通事（脇通事）、在船通事、在船都通事、在留通事、朝京都通事（単に都通事、あるいは北京大通事、大通事ともいう）などの役を経て昇進する（鄭氏会—久米村士族位階〈<http://teiuji.ti-da.net/c134103.html>〉2016年12月12日アクセス）。
- 34) 中国歴代の正史17書の総称。17書とは、「史記」「漢書」「後漢書」「三国志」「晋書」「宋書」「南齊書」「梁書」「陳書」「魏書」「北齊書」「周書」「隋書」「南史」「北史」「新唐書」「新五代史」を指す。
- 35) 1676年に那覇の泉崎に建立された施設であり、儒学の祖である孔子を祀った廟。
- 36) 「注33」を参照のこと。
- 37) 程順則による漢詩集。「雪堂」は号、「燕」は燕京（北京）を指す。福州と北京を往復した際の風物や心情を綴ったもの。
- 38) 中国への進貢の際、進貢副使になる役職。「正議大夫」とは、久米村人に与えられた官位。
- 39) 正三位政務官。進貢使節団の正使。使節団は福州に着くと、①次の夏に琉球へ帰国する「摘回」、②しばらく福州に駐在する「存留」、③中国皇帝に謁見するために北京へ向かう「進京」の3つに分かれる。このうち「進京」は、正使耳目官、副使正議大夫、朝京都通事などの役人やその随行人などで構成された。

- 40) 1705年に中国で出版された詩集。清国を中心に周辺朝貢国の詩人の作品が収められている。琉球の詩人の作品も約70首が収められている。
- 41) 明の洪武帝が民衆教化のために作成した6つの教訓（六諭）を、わかりやすく解説した（衍義）人物。
- 42) ①孝順父母（父母に孝行しなさい）、②尊敬長上（目上の人を尊敬しなさい）、③和睦郷里（村里にうちとけなさい）、④教訓子孫（子孫を教え導きなさい）、⑤各安生理（各々の生業を全うしなさい）、⑥母作非為（悪いことをしてはならない）を指す。
- 43) 井上秀雄監修、JCC出版部著（2011）『絵で解る琉球王国 歴史と人物』JCC出版、112ページ。
- 44) 琉球風の短歌。上句8・8、下句8・6の30音から成る短詩が主流とされる。程順則は、「人の生き方」や「心のあり方」を伝える琉歌を数多く創作した。なお、それらの歌をいろは順に編集した「琉球いろは歌」なるものが存在する。
- 45) 江戸時代中期の儒学者、思想家。徳川吉宗に献上した政策提言集『政談』を記したことで有名。中国語にも堪能であった。
- 46) 江戸時代中期の儒学者。新井白石の推挙で幕府の儒官となり、享保の改革を補佐した。
- 47) 1718年に程順則の建議によって久米村の孔子廟内につくられた。沖縄戦で焼失し、現在は同名の施設が那覇市若狭に再建されている。
- 48) 眞栄田義見（1982）『名護親方程順則評傳』沖縄印刷団地出版部、74ページ。
- 49) グレゴリー・スミッツ著、渡辺美季訳（2011）『琉球王国の自画像—近世沖縄思想史—』ぺりかん社、100ページ。
- 50) 航海の安全を守る女神。『琉球神道記』によると、媽祖は「昼寝中に海上に風波に遭っている5艘の船を両手両足と口で救おうとしたが、父に呼ばれたため1艘は救えなかった。だから、のちに菩薩となって船の災難を救済するようになった」とされる（吉成直樹監修（2013）『琉球王国がわかる！』成美堂出版、92ページ）。
- 51) 大城立裕（1992）『琉球の英傑たち』プレジデント社、239ページ。
- 52) 那覇市企画部市史編集室（1976）『那覇市史 資料篇 第1巻5』那覇市役所、227ページには、次のように記されている。「同 四十五年丙戌四月、使を奉じて進貢正議大夫となる。十一月耳目官馬元勳宮平親雲上良康と共に那覇開船して閩に赴く。次年四月、布政司微紫堂に於て宴を賜う。七月福健啓行し九月山東濟寧州に到る。十月濟寧州起身して京に到り上表して貢物を納む。（中略）十二月三日勅書を領し五日出京し戊子年三月八日福州に至る。五月閩安鎮を出て六月二日歸國し九日勅を捧げて復命す。順則閩に在りて六十金を捐して六諭衍義一部、指南廣義一部を板行す。」なお、文中の「同 四十五年」は、「康熙四十五年」を指す。
- 53) グレゴリー・スミッツ著、渡辺美季訳（2011）『琉球王国の自画像—近世沖縄思想史—』ぺりかん社、108～109ページ。
- 54) 伊波普猷と眞境名安興による著書。五偉人とは、儀間真常、程順則のほか、羽地朝秀、蔡温、宜湾朝保を指す。
- 55) RBC—琉球サウダーヂ〈[http://www.rbc.co.jp/tv\\_program/saudade](http://www.rbc.co.jp/tv_program/saudade)〉2016年12月16日アクセス。

## 参考文献

- 池宮正治解説（2009）『喜安日記』沖縄学研究資料⑥，榕樹書林
- 井上秀雄監修，JCC出版部著（2011）『絵で解る琉球王国 歴史と人物』JCC出版
- 大城立裕（1992）『琉球の英傑たち』プレジデント社
- 紙屋敦之，田名真之，豊見山和行，田里修，仲間勇栄，黒島為一，高良倉吉，糸数兼治，池宮正治，里井洋一，真栄平房昭（1990）『新 琉球史—近世編（下）—』琉球新報社
- グレゴリー・スミッツ著，渡辺美季訳（2011）『琉球王国の自画像—近世沖縄思想史—』ペリカン社
- 桑江克英訳注（1971）『球陽』三一書房
- 古都首里探訪会編著（2016）『王都首里見て歩き—御城と全19町ガイド&マップ—』古都首里探訪会
- 角田多加雄（1984）「六諭衍義大意前史—六諭衍義の成立と，その伝来について—」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要 社会学心理学教育学 第24号』慶應義塾大学大学院社会学研究科
- 高良倉吉，紙屋敦之，豊見山和行，真栄平房昭，上原兼善，梅木哲人，田名真之，池宮正治（1989）『新 琉球史—近世編（上）—』琉球新報社
- 田名真之（1994）『時代を拓く・儀間真常一人と功績』那覇出版社
- 名護市教育委員会名護市史編さん室編（2005）『名護親方程順則資料集・1 人物・伝記編』名護市史叢書11，名護市教育委員会文化課市史編さん係
- 那覇市企画部市史編集室（1976）『那覇市史 資料篇 第1巻5』那覇市役所
- 原田禹雄訳注（1998）『蔡鐸本 中山世譜』琉球弧叢書4，榕樹書林
- 眞栄田義見（1982）『名護親方程順則評傳』沖縄印刷団地出版部
- 増田康弘（2017）「人物像の検討を通して琉球王国の一端に触れる（Ⅰ）—南城市と那覇市のフィールドワークから—」『流通経済大学社会学部論叢 第27巻第2号』流通経済大学
- 諸見里眞行（1955）『産業の大恩人 儀間真常傳』諸見里眞行発行
- 諸見友重訳注（2011）『訳注 中山世鑑』琉球弧叢書24，榕樹書林
- 安田和男（2009）『名護親方・程順則の〈琉球いろは歌〉』ボーダー新書001，ボーダーインク

## 参考サイト

- RBC—琉球サウダーヂ〈[http://www.rbc.co.jp/tv\\_program/saudade](http://www.rbc.co.jp/tv_program/saudade)〉2016年12月16日アクセス
- おきぼた一袋中上人とエイサー〈<http://www.okipota.com/db02/geino/sgeino001/>〉2016年12月16日アクセス
- がじゅまるの樹の下で。〈[http://blog.goo.ne.jp/wa\\_gocoro](http://blog.goo.ne.jp/wa_gocoro)〉2016年12月16日アクセス
- 首里あるき〈<http://shuri-aruki.jp>〉2016年12月16日アクセス
- 浄土宗一袋中上人来琉400年〈[http://jodo.or.jp/event/taichu\\_event/index\\_02.html](http://jodo.or.jp/event/taichu_event/index_02.html)〉2016年12月16日アクセス
- 琉球絆事業協同組合〈<http://ryukyukasuri.com/>〉2016年12月16日アクセス
- 琉球大学附属図書館—職員コラム「きじむんのどうーちゅいむに—」2013年度第10回：北京への道のり〈<http://www.lib.u-ryukyu.ac.jp/?p=9485>〉2016年12月28日アクセス